

MUSASHINO^{Vol.115} *for* TOMORROW

巻 頭

努力の天才

瀬古利彦

(元マラソンランナー／
DeNA ランニングクラブ 総監督)

海外音楽事情

出会いの不思議さ

オーティス・マーフィー
(サクソフォン)

表紙：中谷孝哉 (打楽器)

October 2015
vol.115

努力の天才

瀬古利彦

元マラソンランナー

DeNA ランニングクラブ総監督

マラソン15戦10勝という驚異的な戦績を誇る、日本陸上界のレジェンド・瀬古利彦さん。現役時代は“修行僧”と呼ばれるほどストイックなイメージでしたが、最近では駅伝やマラソンでの明るく楽しい解説でもおなじみです。先頃行われた世界陸上 北京大会の取材から帰国されたばかりの瀬古さんに、マラソンとの出会い、生涯の師・中村清監督とのエピソード、そしてどのようにしてマラソン界最強のランナーにまで登りつめたのか、解説同様にユーモアたっぷりに語っていただきました。(2015年9月3日取材、文責編集部)

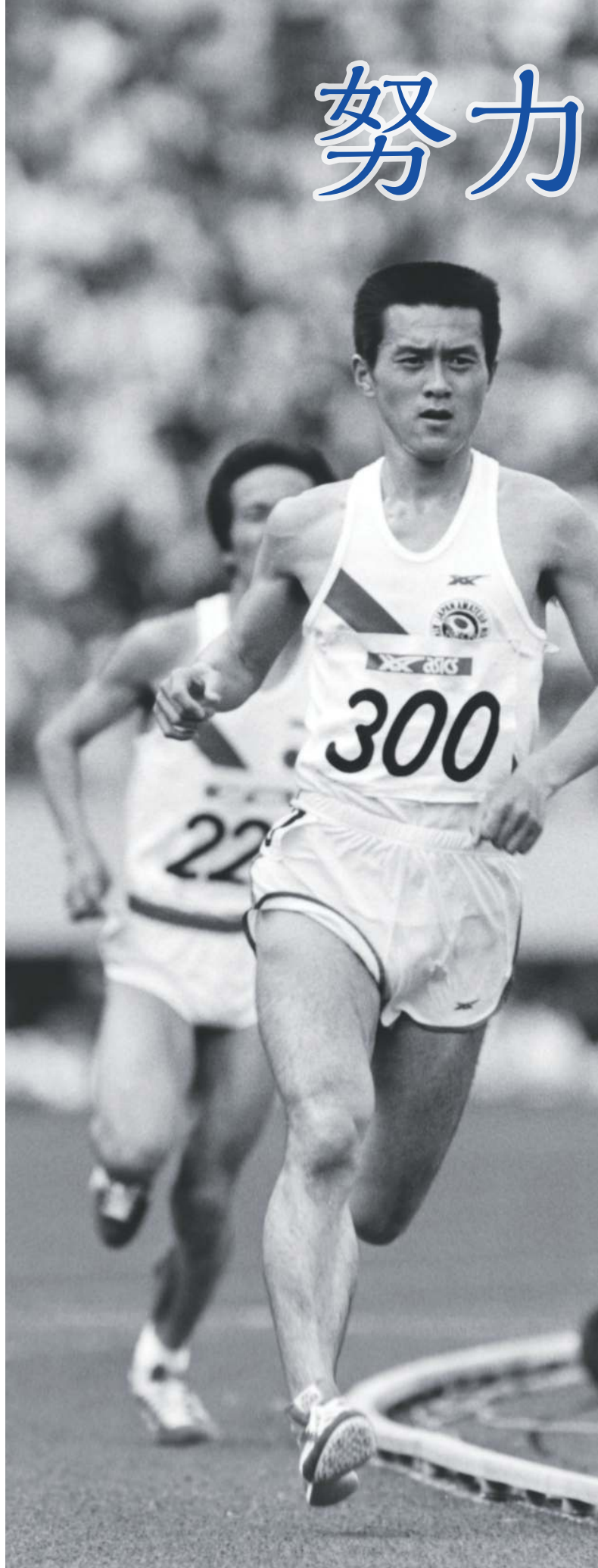


瀬古利彦 *Toshibiko Seko*

1956年7月15日、三重県桑名市生まれ。現役時代は国内外のマラソンで戦績15戦10勝。トラック競技においても5,000mからマラソンに至るまでの日本記録を総ナメにし、25,000mと30,000mでは世界記録を樹立(当時)した。2013年4月より、DeNA ランニングクラブの総監督を務める。

マラソン成績 15戦10勝

- 78-80、83年 福岡国際マラソン 4勝
- 81、87年 ポストンマラソン 優勝
- 83年 東京国際マラソン 優勝
- 84年 ロサンゼルス五輪マラソン 日本代表
- 86年 ロンドンマラソン 優勝
- 86年 シカゴマラソン 優勝
- 88年 びわ湖毎日マラソン 優勝
- 88年 ソウル五輪マラソン 日本代表



▲ アジア陸上10,000mで優勝したときの瀬古さんの力走(1981年6月、国立競技場)

運命の出会いから マラソンへ

小さな頃は野球少年だった瀬古さん。中学では野球部に所属し、ポジションはピッチャー。いつかは甲子園、と描いていた夢がついてたのは中学3年のとき。投げすぎて肩を傷めてしまったという。失意の瀬古少年の、新たな目標になったのが陸上だった。もともと足が速く、運動会やマラソン大会ではいつも1位。陸上部の助っ人として大会にも出場していた。「肩をこわしたのは、顧問の先生の言う通りに毎日300球も投げ込んだため。当時は今と違って真面目でしたから(笑)、先生の言いつけを守ってやり過ぎちゃったんですね。野球を諦めて陸上に進もうと思ったのは、助っ人として出た市や県の大会で勝てたことが大きいですね。2,000mに出場したら、あっさり優勝。勝つっていうのは嬉しいですね。自分が市や県で一番だなんて、びっくりしてしまって。俺ってけっこうできるんだ、と自信が持てました」

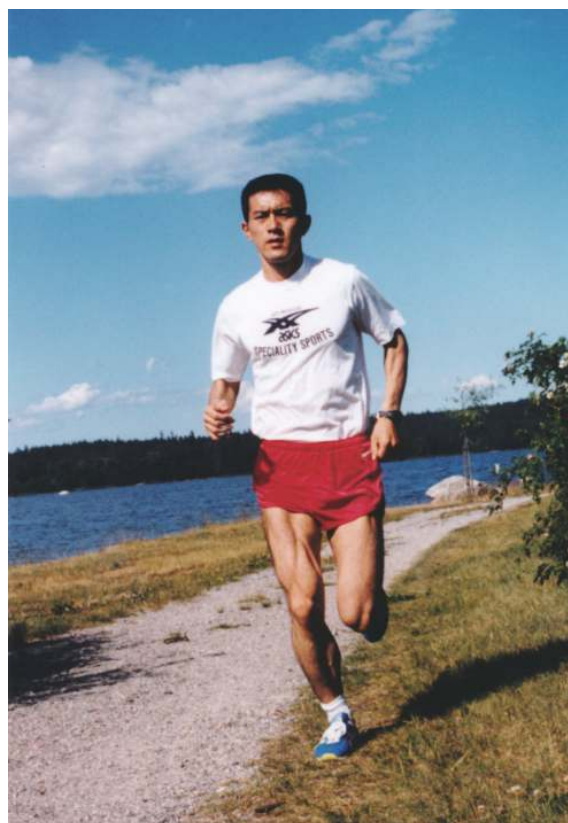
そして陸上の名門・四日市工業高校へ進学。持ち前の才能が徐々に開花し、2年、3年とインターハイの800mと1,500mをダブルで連覇。1年

の浪人を経て、早稲田大学に入学。入学式前の競走部の館山合宿において、その後の人生を大きく左右する運命的な出来事があった。生涯の師となる故・中村清監督との出会いである。「会うなり、中村先生は『瀬古、マラソンをやれ。俺が世界一にしてやる!』と。そして、私はすぐ『ハイ!』。いま思えば、若くて純だったんでしょうね(笑)。その場で即答してしまったんです。アメリカに陸上留学していた浪人時代の1年間は、まともなコーチもいず、練習環境も整っていない中で、毎日ホームシックで泣いていました。自分一人では何もできないと実感し、誰かにすがりたい気持ちでいっぱいだったとき、中村先生に出会ったんです。先生の存在感に圧倒され、先生の一言一言が、砂が水を吸収するように身体に染み込んできました」

初マラソンの失敗を糧に

中村監督との二人三脚が始まり、いよいよ大学1年生の2月、京都マラソンでマラソンに初挑戦。栄光のマラソン人生を送った瀬古さんが、最初のレースは惨憺たるものだった。

「明らかに練習不足。まだまだマラソン選手になりきれていませんでした。30kmあたりからおかしくなり、35km過ぎからは地獄。2時間26分台でようやくゴールに辿りつきました。レース後、がぶ飲みしたオレンジジュースの美味しかったことだ



▲ 欧州転戦の際に拠点としたストックホルム近郊のボソンにて(1985年)

けが初マラソンの良い思い出です」

失敗とも言える初マラソンだったが、以後、瀬古さんは急成長を遂げる。大学2年生の福岡国際マラソンで日本人最高の5位入賞、そして3年生の同じく福岡国際マラソンで2時間10分21秒という当時の日本最高記録で見事優勝を果たした。初マラソンから僅か2年ほどで世界のトップに登りつめることができた要因を、瀬古さんは最初のレースで苦しみを味わったからだと言う。

「マラソンは練習しなけりゃダメだと、最初のレースで痛感しました。練習しないと、こんな苦しい目にあうんだと。二度とあんな苦しみは味わいたくない。なら、練習するしかありませんよね。面白いもので、練習して力がついてくると練習が楽しくなってくるんです。1ヵ月前の自分、1週間前の自分と全然違うことが実感でき、それが励みになって、さらに高い



▲ 大学2年生、初の欧州転戦。ケルンにて中村監督と(1978年)



▲ パリ国際陸上 5,000m (1985年)、2位につけているのが瀬古さん

レベルの練習ができるという好循環でした」

以後、瀬古さんは福岡国際マラソン4勝を始め、ボストンマラソン、ロンドンマラソン、シカゴマラソンなど名だたる大会を制覇。中でも「瀬古強し」を強烈にアピールしたのが、1983年の福岡国際マラソン。ラスト100mでタンザニアの強豪・イカンガー選手を鮮やかに抜き去ったシーンは、今でも語り草となっている。「終盤勝負型のレース展開は、高校時代からの私の勝ちパターンなんです。それをマラソンでも踏襲しただけ。本当は30kmくらいからぶっちぎって勝つのがカッコイイんですが、私にはそんなことはできません。私の武器はスプリント力。スピードだけは自信があったので、先頭集団にくっついていき、最後の最後に抜き去るというレース展開に自ずとなったわけです。セコい(瀬古い!?)レースなんて言われましたけど(笑)。自分の武器、長所を知り、それを活かす闘い方をするのは当たり前のことでしょう」

練習はレースのように

マラソンランナーは毎日コツコツと練習して、本番のレースに臨む。音楽家も毎日練習して本番の舞台に臨

むという点では似ている。瀬古さんは、練習とレース(本番)をどのように捉えているのだろうか。

「現役時代、私は365日休みなしでした。完全休養など考えられません。傍目には大変に映るかもしれませんが、逆に本人は休むと不安なんです。ライバルは頑張っているんじゃないかと、寝ていても不安になるほど。高校の修学旅行の旅先でも、朝4時半ころ、皆が寝ているうちに起き出して走りました。『練習しろ』と言われるようじゃ話になりません。『死んじゃうからもうやめろ』と言われるくらいでないと、マラソンランナーは大成しません。また、よく『練習はレースのように、レースは練習のように』と言われるんですが、実はこれが難しい。このあいだの世界陸上の男子100m。準決勝までを見れば、誰もがガトリン選手(アメリカ)がボルト選手(ジャマイカ)に勝つと予想したで

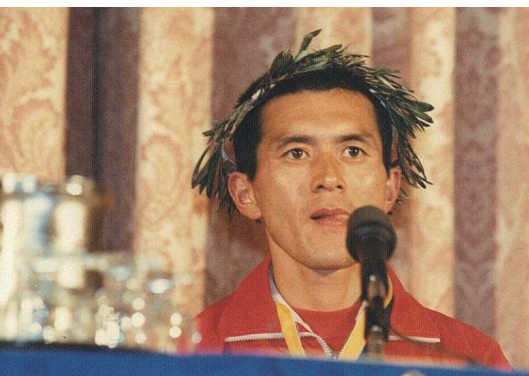
しょう。ところが決勝ではボルトが勝った。決勝の舞台で練習と同じように走れたボルトと、走れなかったガトリン。このシーンが物語るのは、いかにボルトが日々極度の緊張の中で練習しているかということ。彼には本番のレースも全く怖くないのでしょう。だから練習は試合以上に命がけでやらないといけません」

練習に取り組む姿勢に関して、中村監督は「継続は力なり、されど惰性の継続は退歩なり」という言葉を残している。

「ああ、また今日も練習か、イヤだなと思ったら要注意。同じ練習ばかりだと飽きてきたりもしますが、これが続いたら危険信号です。練習はただこなせば良いというものではなく、同じ練習でも初めて行うように、



▲ 見事に優勝したシカゴマラソンのゴールシーン(1986年)



▲ ボストンマラソン優勝記者会見（1987年）

情熱を持って取り組むことが大切だということでしょう」

マラソンは 道路に描く芸術

365日、24時間 マラソンランナーだった瀬古さん。現役時代の総走行距離は地球3周半といわれ、過酷な練習のみならず、生活のすべてをマラソンに捧げてきたと言っても過言ではない。自動車、自転車には極力乗らない。エレベーター、エスカレーターは使わず階段を上り下りする。フォームを固めるため、下宿から大学まで重く頑丈な安全靴を履き、両手にオニギリ大の石を持って通う。こんなことは当たり前だったという。なぜ、そこまで頑張れたのか、自分を追い込むことができたのだろうか。

「食事や交友関係、遊びの面でも確かに制限はありましたが、我慢しているという気持ちはなかったですね。マラソンに自由を奪われたとは思いません。好きなマラソンで負けたくない、強くなってレースに勝ちたい。それだけ。他には何も考えていませんでした。ただ、よく走った代々木公園の園内で同世代の男女が仲良くしているのを見て、少し羨ましく感じたことはありましたが（笑）」

瀬古さんが引退を決意したのは32歳、ソウル五輪のマラソンで9位

に終わった後だった。20歳の初レースから12年、自身のマラソン人生を振り返って、「悔いはない」と言い切る。

「成績は別にして、マラソンを芸術にできたという意味で悔いはありません。中村先生が著書で書いているように、マラソンは道路に描く芸術なんです。ずっとそう思って走ってきました。だから、瀬古さんの走りは美しい、カッコイイと言われたかった。あれは芸術だ、と言われたかった。マラソンも音楽と同じ芸術なんです。道路をピアノの鍵盤だと思って走っているんですよ。スポーツは芸術です。マラソンに限らず、どんな種目でもトップクラスの動きを見れば、人間業じゃない芸術だと感じるんじゃないでしょうか。競歩だって、一流クラスは普通の人走るより遥かに速いですから。音楽とスポーツには共通する部分がある、というより一緒だと思います」

恩師・ 中村清監督のこと

一卵性師弟と呼ばれた中村清監督と瀬古さん。初めての出会いのとき、監督は「速く走れるようになれるなら私は何でもする」と言って、地面の砂をじゃりじゃりと食べてしまったという。そんな強烈なエピソードも数多い中村監督の人となりについて語っていただいた。

「中村清という人間との関係を一言でいえば、『命のやりとり』です。先生は元軍人で、陸軍中野学校出身。すべてが生きるか死ぬか、そういう目線で指導されていました。例えるなら、宮本武蔵のような心境。負け

たら死ぬ、すべてが真剣勝負でした。だから、練習も命がけで取り組みと。そういう教えでした」

たゆまぬ努力の結果、最強のランナーに登りつめた瀬古さんに、中村監督は次のような言葉を贈った。「勝者の頭に飾られる月桂樹の冠も、いつかは朽ちる。ならば、自分の心の中にいつまでも朽ちない冠を持つように努めなさい」。瀬古さんにとっての「朽ちない冠」とは？

「走るのが一番になったら、人間的にも一番になりなさい、そう中村先生はおっしゃいました。子供たちに、『瀬古さんは足も速いけれど、謙虚で素直で、自分もあんな選手になりたい』と思ってもらえるようになりなさいと。そのために必要なのは、“努力の天才”になることだと。人から、瀬古は努力の天才だと言われるようになること、常にそれを目ざして頑張ってきました。練習量だけは誰にも負けなかったという自負があります」

瀬古さん自身も現役引退後、エスビー食品陸上部、母校・早稲田大学競走部の監督を経験した。指導者としての自分を評価すると…。

「今になって言うのもなんですが、私は指導者には向いてなかった。中村先生みたいにしつこくなかったから（笑）。指導者には、しつこさが必要な





▲ エスビー食品陸上部監督時代。一番左が瀬古さん

んです。10回言ってわかってもらえなければ、50回、100回言うしつこさが。監督時代は、毎日、選手との闘いでしたね。『自転車になんか乗るな。歩け』って。『ケニアの選手は絶対に自転車になんか乗らないぞ』って。選手時代には一度も経験したことのない胃痛を、指導者になって初めて経験しました」

人生で一番大事な時期

ランナーにとってのレース、演奏者にとっての舞台。どちらも緊張は避けられないが、瀬古さんはこうした緊張感とどう折り合いをつけてきたのだろうか。

「箱根駅伝などでも、ひどく緊張して

ですね。冷静さを欠いてスパートする場所を間違えたり、伴走車からのアドバイスが全く耳に入らなかったり。練習の成果を本番で出せるかどうかをプレッシャーに感じてしまうケースが多いようですが、私の場合は、練習の成果がどれほどのものか確認できることがすごく楽しみでした。強豪たちと闘うことが不安でもあり、同時にワクワクしていました。レースを成果の発表の場だと考え、勝ち負けじゃなく、自分の力はどれくらいなんだろうと楽しむくらいの余裕

MUSASHINO FOR TOMORROW

いる選手をよく見かけます。タスキを掛けているのにタスキが無い無いと大騒ぎしたり、こうした選手は全く力を出せないで終わることが多い

が必要だと思います。どうせ普段の力以上のものは出せないのですから」

最後に、武蔵野の学生にメッセージをいただいた。

「いろいろなモノが、本当に身に付くのは二十歳すぎまでです。この時期が人生で一番大事。そこで、できるだけ多くのものを吸収してください。この時期の2、3年は、歳をとった時の10、20年に匹敵します。いろいろな人の話を聞き、一生懸命勉強し、一生懸命練習し、食欲にあらゆるものを取り入れて自分のものにしてください」



▲ DeNA 本社にて。瀬古さんと本学 福井直昭副学長 (左)

音楽の万華鏡 32

武満徹と柴田南雄—— 音の言語、言葉の音

来年のことを言うには少し早いですが、2016年は、武満徹(1930-96)と柴田南雄(1916-96)の没後20年になります(柴田は生誕100年でもあります)。武満と柴田の作品をいくつか聴くと、この二人は作風が似ているというよりはむしろ対照的、と感じるのが大方の印象であろうと思われます。ウェーベルン、メシアンをはじめ戦後の前衛音楽の作曲家たちの作曲技法を解題し、自身もその技法で曲を書く理論的な方法論の柴田の作品と、響きを自由にこなわせて塑造する武

満の作品は、そりが合わない、と言いたくなります。

1973年は武満と柴田の分岐点となる年です。1973年に武満は琵琶、尺八とオーケストラのための《秋》を発表しますが、その後は邦楽器のための作品をほとんど書かなくなります。同年柴田は、追分節を合唱と尺八奏者が歩きながら歌い奏する《追分節考》を発表し、その後も、「まりつきうた」「お手玉うた」などのわらべ唄を児童合唱が実際にお手玉やまりつきをしながら歌う《北越戯譜》(1975)、日本書紀の抜粋や各地域の念佛をグループに分かれた合唱が客席を歩きながら歌う《念佛踊》(1976)など、土着の言葉とふしを歌う合唱作品が柴田の創作の中心になっていきます。1973年以降柴田は、尺八と3箏のための《やよいいさよひ》

(1976)、長管尺八のための《霜夜の砧》(1980)など邦楽器のための作品も継続的に書いています。

柴田は、各地域や各時代の文化と生活習慣が吹き込まれた言葉や楽器を自身の創作の素材として選ぶに至ったのに対し、武満はそれらの情報が積み込まれていない素材を選ぶに至ったと思われます。武満は、邦楽器を使うと自分じゃない顔が出てくる旨を語っています。音に自身の言葉を吹き込むことが武満の作曲であるのに対し、柴田にとっての作曲は、言葉や音に吹き込まれた生命の営みを現代に向けて表現することであったと思われます。音を生きたものとして扱う点で二人は共通しています。

榎崎洋子(本学音楽学教授)

出会いの不思議さ

●オーティス・マーフィー（サクソフォーン）●

高校生の時、たまたま耳にしたサクソフォーンの音色。その美しさに魅せられたことをきっかけに、音楽の道に目覚めたというオーティス・



オーティス・マーフィー

Otis Murphy

ジョージア大学で音楽教育を学んだ後、インディアナ大学大学院にてサクソフォーンをユージン・ルソーに師事。博士課程修了。さらにジャン＝イヴ・フルモーのもと、セルジー・ポントワーズ地方音楽院で研鑽を積む。国際H.ヘルマンズ木管楽器コンクール1位、A.サックス国際サクソフォーンコンクール2位など、コンクール等に多数入賞している。

28歳の若さで母校インディアナ大学のサクソフォーン講師となり、現在は教授として後進の指導にあたっている。指導の傍ら、ソリスト、クリニシャンとして、これまでに武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル、東京交響楽団、ヤマハ吹奏楽団、スコットランド室内管弦楽団、インディアナポリス交響楽団、米国海軍バンドなどと共演、国際的に活躍。2005年から、浜松国際ショナル管楽器アカデミーのメンバー、ヤマハのサクソフォーン開発コンサルタントを務めている。2016年にはスティーブン・プラット指揮インディアナ大学ウィンドアンサンブルのソリストとして、カーネギーホールでの公演が予定されている。

2006年、2011年に武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルのソリストとして共演、2015年4月から2ヵ月客員教授として着任。

マーフィー先生。現在、母校インディアナ大学教授であり、ソリストとしても世界を舞台に活躍されている先生は武蔵野との縁も深く、過去に2度、本学ウィンドアンサンブルと共演。本年4月から本学に客員教授として2ヵ月間着任し、バッハザールでリサイタルも開きました。先生に、ご自身の音楽キャリア、指導法や音楽観などについてお話を伺いました。（2015年5月12日インタビュー）

図書館で耳にした音楽

—— 先生がサクソフォーンを始めたのは？

マーフィー 12歳の時、学校のバンドに入って楽器を決めることになりました。光輝く金色のボディ、たくさんのキー、そして「J」のカタチを持つサクソフォーンが、私には何より魅力的に思えて選んだのです。最初はそんな気軽な気持ちで始めたのですが、あるきっかけが私に火を点け、音楽にのめり込むようになりま

した。

—— どのようなきっかけだったのでしょうか。

マーフィー 高校に入ったばかりの頃のことです。私の両親は教員をしており、父はそれに加えて地元の大学キャンパスで警備の仕事をしていました。ある休日、そのキャンパスに遊びに行くと、父がいる図書館から何とも言えない心地良い音楽が流れてきました。そのレコードの演奏者こそが、後の師となるユージン・ルソー先生だったのです。クラシックのサクソフォーンを聴く初めての体験で、一瞬にしてその美しさに魅了されてしまいました。私はサクソフォーンを始めるまでは全く音楽経験がなかったのですが、これをきっかけに猛烈に練習するようになり、皆に追いつくことができました。

さまざまな出会い

—— 高校からの音楽キャリアをお聞かせください。



▲ 通訳の森田恭子准教授（右）と



マーフィー 高校時代に新しいバンドディレクターがやってきました。その方は大学を卒業したての若い先生でしたが、私の演奏を聴いてすぐに才能を見抜いてくれ、この道で頑張るべきだと後押ししてくれたのです。それまでは、ただ好きで吹いているだけでしたが、先生の一言でより真剣に音楽と向き合うこととなりました。今の私があるのは先生のおかげだと、心から感謝しています。高校卒業後は、地元のジョージア大学に進みます。当初は教師になろうと思っていたので、専攻は音楽教育でした。もちろんサクソフォーンは大好きで、常に練習していました。大学を卒業して大学院に進むにあたり、バンドクリニックで教えを受けた先生、この方もルソー先生のお弟

子さんでしたが、彼の勧めもあり、インディアナ大学の大学院でルソー先生に学ぶことにしました。インディアナ時代、武蔵野で長年指導されているクレーマー先生には、私が所属していたウィンドアンサンブルのバンドディレクターとして、大変お世話になりました。

—— インディアナ大学に進学されたあと、留学をされますね。

マーフィー 留学への想いはずっと持っていましたが、経済的な面でためらっていました。そんな折、現在の妻であり当時は婚約者であった晴子が、「フルブライトの留学制度を利用したら」とアドバイスしてくれ、夢が叶ったというわけです。留学先は、ルソー先生の友人でもあるジャン＝イヴ・フルモー先生のいるパリのセルジー・ポントワーズ地方音楽院。フルモー先生のもとで学んだ日々は、まさにマジカル、素晴らしい時間でした。

—— お話を伺っていると、人の縁の不思議さを感じずにいられません。

マーフィー そうですね。振り返ってみると、人と人の出会い、そしてそれがもたらすサポートの大切さをつくづく感じます。クラシック音楽好きの父が聴いていたレコードが縁でのルソー先生との出会い。音楽の道

に進む勇気くれた高校の先生との出会い。インディアナ大学を勧めくれたルソー先生のお弟子さんとの出会い。それらをきっかけにしてのクレーマー先生、フルモー先生との出会い。妻の晴子とも、

彼女がピアニストとしてルソー先生のお弟子さんの伴奏者を務めていたことが縁で知り合いました。本当に、縁とは不思議なものです。

インディアナ大学 教授として

—— 先生は、28歳の若さでインディアナ大学の講師になられたそうですね。

マーフィー インディアナ大学の指導者は、名を成したプレーヤーが大学に戻って務めるというパターンが一般的でしたから、28歳で講師というのは異例のことです。これには、クレーマー先生の、ひとかたならぬ応援がありました。現在は教授として、学部から博士課程にいたる18名の学生の指導にあたり、室内楽、マスタークラス、大きめのアンサンブル、さらに演奏法や教授法などのクラスも受け持っています。

—— 指導にあたり、大切にされていることは？

マーフィー まず、一番大切にしているのは基本的なスケールの練習ですね。音楽的な表現をするためには、音楽史などのさまざまな勉強から得る「確固たる音楽的な基礎 (strong musical foundation)」と「確固たる技術的な基礎 (strong technical foundation)」の両者が揃わなくては いけません。インディアナ大学では、新入生と大学院生がスケールを一緒に学ぶ時間を設けています。1年生は先輩たちのようになろうと努力し、上級生はさらに上手くなろうと努力する。双方が刺激を受ける非常に良いやり方だと思っています。ありがたいことに、武蔵野でもそれに近い形を実現させていただいています。

また個人レッスンでは、皆に同じレパートリーを押し付けることはしません。それぞれのレベル、興味や熱意に応じて、ふさわしい曲を選ん



▲ 本学ウィンドアンサンブルと初共演し、スミス作曲《ファンタジア》を演奏 (2006年7月)



▲ 本学でのレッスン風景

でいくようにしています。ただし、いわゆるスタンダードと言われる曲に、多くの時間を費やすことも大切です。なぜなら、世界のどこのマスタークラスでも、スタンダード曲は、言ってみれば受講生にとっての共通言語となるわけです。将来、指導する立場になるのであれば、スタンダードな曲は、どうしても取り上げなくてはならないのです。また、ソリストとしての活動を視野に入れて、聴衆に適したプログラム作りに、フレキシブルに対応ができるような指導も心がけています。そして、もう一つ。練習方法を学んでもらえるよう、さまざまな工夫をしています。

—— 先生の教え子たちは、卒業後、どのような方面に進んでいるのでしょうか。

マーフィー 大学院の博士課程修了者は大学で指導者になることが多く、ワシントンDCにある軍楽隊に行く者もかなりいます。プロの演奏家として活躍している卒業生も多くいます。室内楽をやっている者たちもいます。しかし、ご存知のようにアメリカは広大ですから、メンバーが集まって限られた時間で曲を仕上げるという、プロならではのライフスタイルが求められます。

自分自身に耳を傾ける

—— 先生ご自身の音楽に取り組む姿勢、演奏者また指導者としてのモットーをお聞かせください。

マーフィー 私は毎朝、学校に着くと自分の決まった練習から始めます。大学では、自分の練習と指導を両立させ、家に戻れば家族との時間を楽しむことに徹します。そんな姿を、学生たちが見てくれることを期待しています。プロと

アマの違いは、何があろうと毎日厳しい練習を自分に課することができるかどうかではないでしょうか。また、学生たちとは言葉だけでなく、楽器でコミュニケーションをとるということも心掛けています。

—— 最近日本ではウィンドアンサンブルの人気のとても高いのですが、アメリカと比べて何か違いを感じることはありますか。

マーフィー ゲストとして吹かせていただくことが多いので、正直言ってあまり違いを感じることはありません。アメリカには、さまざまなタイプのウィンドアンサンブルがあります。インディアナ大学のウィンドアンサンブルのメンバーは大学院生が中心であるのに対し、武蔵野では学部生が中心ですね。それにも関わらず、要求水準が高いことに驚かされました。演奏者の成長にとって、経験は欠かせないもの。音楽的な深みをもたらしてくれますね。

—— 今回、武蔵野の客員教授として学生たちの指導をお願いしていますが、武蔵野の印象は？

マーフィー 武蔵野での生活を大変エンジョイしています。学生12名を指導していますが、職員の皆さんと先生方の素晴らしいサポートのおかげで、私は教えることだけに専念できています。結果、短い時間であっても十分な成果を上げることができると感じています。

—— 最後に、音楽を学ぶ学生たちにメッセージをお願いします。

マーフィー 何より伝えたいのは、一人ひとりにとって、この世で最も優れた教師は、自分自身であるということ。質の高い音楽的な基礎と技術的な基礎が培われていけば、そこから聞こえてくる自分自身の音や声に従って、音楽を作り上げていくことができるということです。

(インタビュー・通訳:森田恭子)



▲ オーティス・マーフィー サクソフォーン・リサイタル／ピアノ：晴子夫人 (2015年6月19日、入間キャンパス バッハザール)

順調に進むプロジェクト！

本学江古田キャンパスは、去る4月1日の2号館(図書館、学生ホールなど)と3号館(レッスン室、練習室など)を繋ぐ渡り廊下解体を皮切りとして、平成29年1月の新キャンパス竣工に向け、株式会社大林組によりいよいよ本格的に着工されました。本号では4月からこれまでの工事の様子をお伝えします。

解体された
旧江古田校舎

3月まで使用していた旧校舎の解体工事が始まり、その最初の段階として、まず内装材の解体を人の手によって行い、資源に出来るものとそうでないものに分ける必要がありました。その後、地上の躯体、つまり固いコンクリートの柱や壁などを、まるで肉食恐竜の口のような大型重機のアームの先端によって噛み砕き、細かいコンクリートの塊と鉄筋を綺麗に分別して集積の上、資源のリサイクルの為に最終処分場へと運んでいきました。

5月の連休明けからは、2号館から3号館、9号館(楽器博物館)、7号館(モーツァルトホール)…と順次上屋の解体が進んでいきました。また、全面建て替え

の中で唯一保存され、耐震補強やバリアフリー化などの改修工事が行われるベートーヴェンホールに設置されたパイプオルガンの大掛かりな養生、ならびに同ホールの特殊天井の保存方法を考察する為の調査準備なども、5月から6月にかけて進んでいきました。

他の建屋も順調に解体され、残りの建屋も5号館(レッスン室、スメタナホールなど)のみとなった7月には、その周りの地下構造物の解体や、8月からの新築工事準備に向けた工事が始まりました。新築建物の重要な基礎となる杭を地中に打ち込む為の100tクラスの杭打重機や、種々の大型工事車両が場内を動くことができるように地



▲ 現場全景 (7月24日)

盤改良を施した後、9月からは、新キャンパス北側に建てるブラスホール(中ホール)棟、オーケストラホール棟の基礎躯体工事に向けて、掘削工事が進行して

います。また新キャンパスの中心となるサンクンガーデンを囲む図書館棟ほかの建物の重量を支える為に、地中深さ約22mまで達する杭を打込んでいきます。



▲ 1, 2, 3号館建屋基礎解体状況 (7月29日)



▲ 7号館(旧モーツァルトホール)内装解体状況 (5月28日)



▲ 3号館建屋解体状況 (5月27日)



▲ 南側 山留杭打設状況 (9月2日)

膨らむ新キャンパスへの期待！

江古田新キャンパス起工式

旧校舎の解体工事が順調に進む中、7月21日には江古田新キャンパスの起工式が無事に執り行われました。まずキャンパス内において地鎮祭が行われ、施主を代表し本学園 福井直敬理事長が鍬、施工者を代表し株式会社大林組 白石達社長が鋤を入れ、参列者一同工事の安全を祈願しました。

神事の終了後、会場を池袋のホテルメトロポリタンに移して直会(なおりい)が行われました。福井理事長、白石社長の挨拶の後、福井直昭本学副学長の乾杯の発声により、和やかかつ活気に満ちた会が進行し、参列者は「総合的な演奏環境が整った新しい都心型キャンパスの誕生」「建築における和の精神の実現」への期待に胸を膨らませながら暫し



▲ 地鎮祭において鍬入れをする本学 福井直敬理事長

歓談をしたのち、大林組 今井幸弘所長の締めにより、閉式されました。



▲ 地鎮祭会場に展示された完成イメージ図



▲ 株式会社大林組 白石 達社長



▲ 本学 福井直昭副学長



◀ 株式会社大林組 本プロジェクト設計チーム

多彩なプログラムで聴衆を魅了したウィンドアンサンブル演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの夏の公演が、去る7月15日、東京芸術劇場 コンサートホールにて開催されました。またそれに先がけ、同窓会山形県支部の方々のご協力により、7月11日酒田市民会館「希望ホール」、7月12日やまぎんホール（山形県民会館）で演奏会が行われ、多くの方にご来場いただきました。

指揮者に米国吹奏楽界の重鎮で

あるレイ・E. クレーマー教授を迎え、ブロートンのセレブレーションで華々しく幕開け。続いてバッハの幻想曲ト長調と小フーガト短調、マクリスの序曲「エーゲ海の祭」、東日本大震災の地震と津波の追憶と祈りを捧げるために、クレーマー教授と本学ウィンドアンサンブルに献呈された、ヴァルチックのイロア・イロア（世界初演）を演奏。パーシケッティの吹奏楽のための仮面

舞踏会で前半を締めくくりました。後半は、国際的なピアニストで、毎年本学を訪れ指導に当たっているケマル・ゲキチ教授をソリストに迎えて、ガーシュウインのラプソディ・イン・ブルーを披露。刺激的なパフォーマンスを目の当たりにした聴衆は、熱気に包まれました。続いてロジャースのサウンド・オブ・ミュージック、チャイコフスキーの《雪娘》より〈道化師の踊り〉、吹奏楽コンクール課題曲などが演奏され、満員の会場に響き渡った“武蔵野サウンド”に盛大な拍手が送られました。



▲ 東京芸術劇場 コンサートホール



▲ ピアノソリストのゲキチ教授

東京・広島・山口で管弦楽団定期演奏会

7月に行われたウィンドアンサンブルの公演に続き、本学管弦楽団の演奏会が、9月15日、東京芸術劇場 コンサートホール、同窓会広島・山口両県支部の皆様の協力により、9月11日広島文化学園 HBG ホール、9月13日山口市民会館 大ホールで開催され、それぞれ成功裏に終了しました。

カールマン・バルケシュ本学客員教授の指揮で、プログラムは、J. シュトラウス2世の《こうもり》序曲で開幕。続くショパンのピアノ協奏曲第2番では、学内オーディションで選抜された上坂愛美（大学ヴィルトゥオーソ学科4年：11日、13日）、大日方里奈

（器楽学科3年：15日）の両名がピアノソリストを務め、色彩豊かで繊細なパッセージを見事に表現し、真摯な

演奏が好評を博しました。最後は、チャイコフスキーの交響曲第5番。ロシア音楽の雄大な曲想と抒情的な旋律を存分に響かせ、高揚感溢れる演奏に、各会場から温かい拍手が送られました。



▲ 東京芸術劇場 コンサートホール

附属音楽教室 “ミュージックキャンプ” 開催

爽やかな風が吹き抜ける武蔵野音楽大学「軽井沢高原研修センター」で、今年も附属音楽教室の“ミュージックキャンプ”が開催されました（入間・多摩教室7月30日～8月1日、江古田教室8月2日～4日）。

キャンプでは、普段、取り組む機会の少ない室内楽や連弾、ピアノデュオ、合奏、合唱などを経験しましたが、音楽以外でも生活の面で一人ひとりが係りを受け持ち、それを立派に果たすことも大切な要素。参加した小学3年生から高校3年生までの生徒たちが共に協力し、学年を越えて仲良くなれるのも魅力のひとつです。

短い準備期間でしたが、先生方の指導のもと熱心に練習に取り組み、コンサートではその成果を十

分に発揮し、全員生き生きとした演奏を行うことができました。終演後、上級生たちが下級生の面倒を見るのも、音楽教室ならではの伝統です。

最終日には、アイデアを活かしたレクリエーションで大いに盛り上がり、更に親睦を深めることができました。カブト虫やクワガタなどが姿を見せる自然の中で過ごした充実の3日間は、生徒達の心に一生の思い出となって残ることでしょう。



▲ 軽井沢高原研修センター 大研修室にて

● 表紙の顔



中谷孝哉さん

北海道釧路市出身。1978年東京藝術大学音楽学部器楽科打楽器専攻卒業、「安宅賞」受賞。1980年同大学院修了。高橋美智子、有賀誠門に師事。在学中から、東京マリンパバンドやパーカッショングループ72、東京ブラストサエティ、東京吹奏楽団等で活躍しました。

1984年、第1回日本管打楽器コンクール第1位を受賞し、同年より21年間にわたり、新日本フィルハーモニー交響楽団の打楽器奏者を務めました。

オーケストラ・プレイヤーとして、サイトウキネン・フェスティバルに度々出演する他、国内のメジャーオーケストラ、ベルリン・フィル、ボストン響などと、ソリストとしては、新日本フィル、東京フィル、アンサンブル金沢と共演しています。また、中谷幸子とのマリンパデュオ「ダヤ・チブタ・マリンバ」を主宰するなど活発な演奏活動の傍ら、陸上自衛隊、海上自衛隊の講師、ルーマニア国際音楽コンクール及び埼玉県吹奏楽連盟コンクールの審査員を務めています。

現在、武蔵野音楽大学教授、同附属高等学校でも指導にあっています。宮内庁式部職楽部オーケストラ打楽器奏者。

【最近の活動】

西洋の音階とは全く異なるバリ・ガムランを実践するため、2013年より「深川パロン倶楽部」のメンバーとなり、昨年6回、今年も6回のステージに挑戦しています。オーケストラ、マリンバ、ガムランの演奏を实践する、稀なプレイヤー兼指導者として、還暦を越えても新境地に挑み続けています。

着任外国人教授紹介 (平成27年度後期)



リチャード・K. ハンセン *Richard K. Hansen* (ウィンドアンサンブル指揮/アメリカ)

米国ミネソタ大学大学院博士課程音楽学専攻修了。現在、米国ミネソタ州セントクラウド州立大学の教授として、指揮法及び音楽学の教鞭を執る傍ら、同大学ウィンドアンサンブルのバンドディレクターを務めている。指導する同大学のウィンドアンサンブルは、全米吹奏楽指導者協会 (ABA) の総会をはじめ、数々のコンベンションでも演奏し、非常に高い評価を得ている。指揮者としては、米国各地、デンマーク、ノルウェー、

メキシコ、ロシア等の吹奏楽団と共演、また多数の作品初演もある。音楽学者としても国際的な評価を得ており、世界吹奏楽協会 (WASBE)、ミッドウェストクリニックなどに於いて講演を行う他、執筆活動も行っており、著書には「The American Wind Band - A Cultural History」がある。本年10月より着任。



武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名(五十音順)は、平成27年5月11日から7月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきます。何とぞご了承ください。

【同窓生】 秋山佳子様 荒川昭子様 安蔵 靖様 安東直子様 五十嵐和子様 伊藤昭子様 伊藤征夫様 伊藤利子様 井上はるみ様 印南英里様 上田眞由美様 上野和子様 上村由利様 大光子様 太田規子様 桶田美紀子様 梶 裕里子様 金子朝子様 神野藤真砂子様 草道恵美子様 久邇邦昭様 熊坂良雄様 久米泰好様 小泉美佳様 小山陽子様 近藤惇子様 齊藤愛香様 齊藤博子様 佐々木治子様 佐竹舒子様 佐藤かおり様 志賀訓子様 篠原由美恵様 島村有為子様 下田正幸様 下道ヨシ子様 庄司正子様 滝口智子様 巽 蔦枝様 田中久美子様 田中真理子様 田辺伸子様 田辺礼子様 谷川智美様 谷川美千代様 樽田千草様 坪井由起子様 鴛田 恵様 中村昭一様 夏賀節子様 橋本徳子様 長谷川光子様 濱島幸枝様 濱田三佳様 林 敦子様 原 和恵様 原口恵美子様 原口隆一様 檜垣啓子様 樋口美代子様 常陸純子様 平井和美様 古川薫子様 許 伯恵様 北條ますみ様 堀内照子様 本宿伶子様 真壁玲子様 松岡雅子様 松本寛子様 麦倉礼子様 元田牧子様 本柳ひろみ様 森岡 翠様 森本晶子様 柳沼俊平様 柳沼輝子様 山本裕子様 八幡洋子様 吉川晶子様 吉田厚子様 善積利津子様 李 宜蓉様 渡辺綏子様 同窓会徳島県支部様 同窓会北海道中央支部 G・むさしの様

【在学生・同ご父母】 池ノ谷静一様 伊勢福修司様 市村行孝様 猪瀬博明様 岩崎真子様 上田公一様 江口 創様 大貫美鈴様 大野宗一様 岡部行伸様 岡本秀樹様 柿沼深生様 片所寿雄様 加藤元春様 川島 武様 木村和泉様 小松智子様 斎藤 晋様 塩原規男様 白井泰明様 鷺見浩二様 高木恵津子様 多田健二様 塚田恒憲様 露木賢治様 徳永智雄様 鳥居千春様 中野目 啓様 中村彰夫様 乗田昌広様 福尾昭人様 本木 正様 本間敬二様 箕輪忠男様 諸江久尚様 山口達之様 渡辺幸栄様 渡辺 靖様

【役員・教職員・一般・他】 安孫子和子様 新井和子様 川崎周子様 清野美佐緒様 小林五郎様 佐藤しのぶ様 真田朗子様 佐野貴昭様 耕 修二様 田口久仁子様 田代慎之介様 塚田雄二様 中川俊宏様 中野有希子様 野尻 米様 春山和雄様 日高正枝様 福井直敬様 山口道子様 山越正秀様 渡辺亜紀様 (他に匿名を希望される方33名)

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

●2015年アメリカン・バンドマスターズ・アソシエーション名誉会員に選ばれる

武田 晃(昭和55年大学卒トランペット専攻)

●第45回 イタリア声楽コンクール シエナ大賞受賞

小笠原一規(平成15年大学卒声楽専攻)

●第4回 国際フラメンココンクール"ブーロ・フラメンコ"(イタリア) ソリスタ・プロフェッショナル部門 優勝併せてタブラオ・エル・アレナル賞、Claudia Allasia 賞、セノビージャ賞、フェスティバル・デ・ヘレス賞受賞

井口裕香里(平成13年大学卒声楽専攻)

●第30回 練馬区新人演奏会出演者選考オーディション ピアノ部門 最優秀賞受賞

馬場翔太郎(大学3年次在学ピアノ専攻)

●第51回 日伊声楽コンクール 入選 黒田詩織(平成19年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了)、●第19回 松方ホール音楽賞 打楽器部門 奨励賞受賞 松岩沙季(大学4年次在学マリンバ専攻)、●第17回 日本フルートコンヴェンション2015 in ふじのくに静岡コンクール アンサンブル・アワード部門 第2位入賞 香川恵理(平成26年大学卒フルート専攻)、鈴木英美子(平成26年大学卒フルート専攻 本別科修了)、渡辺梨乃(平成26年大学卒フルート専攻)、●第11回 ルーマニア国際音楽コンクール 打楽器部門 第1位入賞 堀野美佳(平成27年大学卒打楽器専攻 本別科在学)、第2位入賞 中林恵子(大学4年次在学打楽器専攻)、●市川市文化振興財団 第28回 新人演奏家コンクール 管楽器部門 最優秀賞受賞 大野葉一朗(平成27年大学卒オーボエ専攻)、●第20回 JILA 音楽コンクール 管楽器部門 第3位入賞(1位なし) 島田 明(平成27年大学卒フルート専攻 本大学院修士課程1年次在学)、●第18回 "長江杯" 国際音楽コンクール 声楽部門 一般の部 A 第2位入賞 宇高陽子(平成17年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了 本別科修了)、アンサンブル部門 一般の部 B 第3位入賞(1位なし) 藤本直美(昭和61年大学卒ピアノ専攻)

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

編集後記

巻頭にご登場いただいた、「努力の天才」瀬古利彦さん。どんな過酷な練習も、強くなるためには当たり前のことだと柔和な表情で

語ってくださいました。ひとつの道を究めようとするれば、揺るぎない覚悟が必要だと改めて教えられたような気がします(編)。

平成 27 年度 11 月～12 月 演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会

指揮＝前田 淳 11 月 14 日(土) 15:30 バッハザール(入間) ¥1,000(全席自由)
 曲目＝デロ＝ジョイオ：中世の旋律による変奏曲、川辺 真：序曲「希望岬にて」
 グレインジャー：子供のマーチ「丘を越えて彼方へ」、スパーク：ドラゴンの年 他

ニュー・ストリーム・コンサート 27 ～ヴィルトウオーソ学科演奏会～

11 月 19 日(土) 19:00 トッパンホール ¥1,500(全席自由)
 出演＝馬場翔太郎 (Pf.)、佐藤祐実 (Fl.)、野川かおる (Pf.)、平山 慧 (CL.)、綾目奈緒子 (Ob.)、犬飼まお (Pf.)

イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル

11 月 20 日(土) 18:00 バッハザール(入間) ¥1,000(全席自由)
 曲目＝ドビュッシー：前奏曲集 第1巻、ベートーヴェン：アンダンテ・ファヴォリ、ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲 他

武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会

12 月 1 日(火) 16:00 バッハザール(入間) 一般 ¥1,500 / 学生 ¥1,000(全席自由)
 指揮＝飯守泰次郎 合唱指揮＝栗山文昭 12 月 2 日(水) 19:00 東京芸術劇場 コンサートホール ¥1,500(全席指定)
 独唱＝砂川涼子 (Sop.)、小笠原一規 (Ten.) 1 日／曾我雄一 (Ten.) 2 日、谷 友博 (Bar.) 児童合唱＝武蔵野音楽大学附属音楽教室
 曲目＝モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク、オルフ：世俗の賛歌《カルミナ・ブラーナ》

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会

12 月 14 日(日) 18:30 東京芸術劇場 コンサートホール ¥1,500(全席指定)
 指揮＝リチャード・K. ハンセン ホルン独奏＝丸山 勉
 曲目＝パーシケッティ：吹奏楽のための詩篇 Op.53、エレビー：パリのスケッチ、榎屋雅徳：トビアスの家を去る大天使ラファエル
 バーンスタイン：《オン・ザ・タウン》より〈タイムズ・スクエア〉、ボザ：森にて 他

お問合せ ● 武蔵野音楽大学演奏部 TEL.04-2932-3108

※やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは武蔵野音楽大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/> でもご予約ができます。

武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 平成 27 年度 冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込 受付期間	会場
音楽大学 受験講習会	平成 27 年 12 月 23 日(水) ～ 26 日(土)	平成 27 年 11 月 12 日(水) ～ 12 月 12 日(土)	武蔵野音楽大学 入間キャンパス
高校音楽科 受験講習会	平成 27 年 12 月 24 日(木) ～ 26 日(土)	平成 27 年 11 月 12 日(水) ～ 12 月 12 日(土)	

要項請求：武蔵野音楽大学企画部広報課(TEL.04-2936-9737)、または大学ウェブサイトにてお申し込みください。(要項は無料、郵送料は学園が負担します)
 大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>

平成 28 年度 入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、入間キャンパスで取り扱っています。

郵送をご希望の方(平成 28 年度受験対象者)には、無料でお送りいたします。本大学ウェブサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および希望される附属高校、大学 1 年次、大学 3 年次編・転入、大学院、別科の別をお知らせください。

なお、冬期受験講習会を受講の方には講習期間中に配付します。

【請求先】武蔵野音楽大学企画部広報課

〒358-8521 埼玉県入間市中神 728 TEL.04-2936-9737
 大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>



本学合唱団、 小林紀子バレエ・シアター公演に出演

本学合唱団(合唱指導：横山修司准教授)、ソプラノの國光ともこ(本学卒)が、8 月 21 日～23 日に新国立劇場中劇場で開催された小林紀子バレエ・シアター公演「ミックス・プログラム」の「グローリア」に三日間にわたり出演しました。(振付：ケネス・

マクミラン、指揮：ポール・ストバート、演奏：東京ニューフィルハーモニック管弦楽団)

1980 年に英国ロイヤル・オペラで初演された、ブーランク作曲の神への賛歌「グローリア」。崇高な旋律、そして輝かしいソプラノと合唱による歌声が、躍動的で格調高いバレエとともに、心の奥深くに浸り込んでいく様は、観客の心を虜にしました。

本学合唱団、「読響シンフォニックライブ」に出演

日本テレビ主催「読響シンフォニックライブ」の公開収録に、本学合唱団(合唱指導：栗山文昭教授)、ソプラノの森谷真理(本学卒)が出演します。久石 譲指揮によるカール・オルフ作曲世俗の賛歌「カルミナ・ブラーナ」。本学大合唱団によるスケールの大きな演奏をご期待ください。

日時：10 月 29 日(木) 19:00 開演/会場：東京芸術劇場

2015 真夏の夜のコンサート出演

8 月 21 日、所沢ミューズ・アークホールで読売新聞所沢センター主催「2015 真夏の夜のコンサート」が開催され、今年で 20 年目となる節目の公演に、本学学生・卒業生が出演しました。ピアノ・ソロ：福井敬介、ハープ・デュオ：原日向子、三谷真珠子、テノール・ソロ：小笠原一規(本学卒)、そして打楽器アンサンブル：鈴木詩織(マリンバ)、松岩沙季(マリンバ)、高橋由詩(パーカッション)の 4 組が華やかに演奏を繰り広げ、大勢の聴衆から熱い拍手が続きました。

クルース

セント・ジョージ作 1912年頃 イギリス 全長58cm

クルースは弓奏の豎琴ともいえる楽器で、中世から19世紀前半まで現在のアイルランドやウェールズ地方などで使われた。奏者は楽器を腿に挟み、左手で指板を押さえながら右手の弓で演奏する。張られた6本の弦は、基本的に同時に演奏される。この楽器の祖形は古代の豎琴にまで遡ることから、一時期、このクルースがヴァイオリンのような弓奏楽器の祖先ではないかと考えられ、その提唱から「最も古い弓奏楽器は何か」という論議が交わされることになった。

1830年代に、ベルギーの音楽学者フェティスは、クルースの両側のわく木を取り、中央の指板が残ることでヴァイオリン型の楽器が誕生したと述べた。しかし賛否両論の中、1856年、フェティスはそれまでの説を改め、クルースは後発の楽器であり、紀元前3000年にインドで使われていた楽器が最古の弓奏楽器であると主張を転換した。この考えは19世紀を通しての通説となり、「楽器学の父」として高名なドイツのザックスも、当初はフェティスの意見に同調している。しかし、ザックスは1940年にその考えを撤回し、最初の弓奏楽器は、9世紀ごろの中央アジアに出現したと主張した。この説を裏付けるかのように、1966年にドイツの音楽学者バッハマンは、多くの



図像資料から弓奏楽器は8世紀以前には存在しなかったことを証明し、現在はその説が広く受け入れられている。

このように最古の弓奏楽器をめぐる研究は、多くの学者により様々な説が唱えられてきた。そして唱えられた学説は、時には提唱した本人により撤回されている。ここには学問追求の自由な討議の姿が映し出されている。クルースに端を発したヨーロッパの楽壇での論争から、私たちは自由闊達な学問論議のあり方を学ぶことができるのである。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

大学機能の一時移転のお知らせ

武蔵野音楽大学は、現在進行中の「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」に伴う新築工事のために、平成29年3月まで大学の機能を入間キャンパスに移転しています。期間中は何かとご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

❖ 目次 ❖

- 努力の天才 瀬古利彦 ①
- 音楽の万華鏡 ⑤
- 武満徹と柴田南雄——音の言語、言葉の音 樋崎洋子
- 海外音楽事情 ⑥
- 出会いの不思議さ オーティス・マーフィー
- 江古田新キャンパスプロジェクト REPORT ⑥ ⑨
- 順調に進むプロジェクト！ 膨らむ新キャンパスへの期待！

MUSASHINO NEWS

- ❖ 多彩なプログラムで聴衆を魅了したウィンドアンサンブル演奏会
- ❖ 東京・広島・山口で管弦楽団定期演奏会
- ❖ 附属音楽教室「ミュージックキャンプ」開催
- ❖ 着任外国人教授紹介
- ❖ 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- ❖ 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- ❖ 平成27年11月～12月 演奏会のお知らせ
- ❖ 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 平成27年度 冬期講習会のお知らせ
- ❖ 平成28年度入学試験要項請求について
- ❖ MUSASHINO 掲示板

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖

学校法人 武蔵野音楽学園

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2015年10月1日発行 通巻第115号